

近世

第9章 幕藩体制の成立と展開 5. 元禄文化 (1) 元禄文化

『堀川波鼓』 — 鳥取藩士が主人公の浄瑠璃 —

〔史料1〕『因府年表』宝永三年六月二十九日条
 今度御供にて罷帰候御料理人大倉彦八事、在江戸中、妻儀、京都より御雇にて参居候小鼓打宮井伝右衛門と密通の不義有之事発覚して、先に妻を刃害し、妻敵を相尋可申為、御暇を相願、頓て致発足候処、今日京都堀川通りにて伝右衛門へ出逢う、早速討留之。

〔史料2〕『因府年表』宝永三年六月二十九日条
 大倉彦八事、先に公辺相済、御家へ御返しに相成候に依て、(中略)罷帰り候処、今日御目見徒に帰参被仰付。

[参考] 『堀川波鼓』解説

[上演] 1707(宝永4)年2月、竹本座初演

[作者] 近松門左衛門

[登場人物]

小倉彦九郎(鳥取藩士)、たね(彦九郎の妻)、宮地源右衛門(鼓の師匠)、ふぢ(たねの妹)、文六(彦九郎の養子)、ゆら(彦九郎の妹)、磯辺床右衛門(彦九郎の同僚)

解説

『堀川波鼓』は、1707(宝永4)年2月に大坂の竹本座で初演された近松門左衛門作の世話物で、前年6月29日に京都で起こった鳥取藩士の妻敵討ちを題材とする。登場人物の名前や立場は、実際の事件の関係者に基づいて設定されている。

■物語の概要

鳥取藩士の小倉彦九郎が参勤交代のお供で国元を留守にしている間、妻のたねは鼓の師匠である宮地源右衛門と不義をはたらいた。不義が発覚した後、たねは自害したが源右衛門は逃亡した。彦九郎は親族とともに追ひ、ついに京都堀川で源右衛門を討ち果たした。

■実際の出来事

鳥取藩士の大倉彦八が参勤交代のお供で江戸に滞在中、妻は小鼓打の宮井伝右衛門と密通した。それを知った彦八は妻を殺害し、逃亡した伝右衛門を追った。その後、彦八は京都堀川通りで討ち果たし、鳥取藩に帰参することができた。

■元禄文化の特徴

光源氏のような貴族、源義経のような英雄、桃太郎のような超人、かぐや姫のような宇宙人といった特殊な存在ではない、普通のどこにでもいるような人物を主人公とし、実話をもとにした物語がつくられる。それは、主人公に共感し、主人公と同様なことが自分にも起こりうると感じた人々が多くいたことによるものであり、元禄文化以降、町人が文化の担い手になったことを反映している。

(担当：石田敏紀)

参考資料

- 『堀川波鼓』(新編日本古典文学全集 75 「近松門左衛門集②」)小学館 (1998年)
- 鳥取県『鳥取県史 7 近世資料』(1976年)